

追悼

弔辞

(元日本神経化学会理事長・東京大学名誉教授・  
理化学研究所脳神経科学研究センターチームリーダー) 御子柴克彦

池中先生とこのような形でお別れのことを述べなくてはならないことは大変に悲しいことです。余りにも早すぎます。池中先生とは、私が1985年に大阪大学蛋白質研究所に赴任したとき以来の長い付き合いになります。

池中先生はアメリカへ留学されていらして私が日本から電話をかけてこれからの研究のことについて話したのが最初の出会いです。大腸菌での分子生物学を哺乳類の分子生物学へと転換して導入して私達の研究を飛躍的に発展させてくれました。

世界的には「分子生物学」をしていた人たちが、神経研究に入ってくる流れの中で、「神経生物学」から「分子生物学」の領域へ打ってでた世界的にも最初のグループであり、かつ世界を打ち負かすという



大阪大学蛋白質研究所の正面玄関で御子柴研究室立ち上げ間もない頃(1986年)の研究室のメンバー

池中一裕先生は前列一番右、御子柴は左から2人目。この写真の中に岡野栄之(慶應大)、田村隆明(千葉大)、古市貞一(理科大)、三浦正幸(東大)、前田信明(都医学研)、宮脇敦史(理研PI)、鹿川哲史(生理研)、山本秀幸(琉球大)等のPIとして後に国際的に活躍するメンバーの顔ぶれがあります。

気概を皆で共有していたユニークなグループでした。

これを可能にしたのは池中先生の力であり、阪大蛋白研を発展させるのに大きく貢献されました。当時の研究室には多くの多様なキャラクターをもつ人材にあふれていてまさに梁山泊でした。この集団を大変にうまくまとめあげられました。池中先生とはまさに戦友でありました。先生との思い出は余りにも多く語り尽くせないほどです。

池中先生は生理学研究所へ移られてから活躍の場を国内のみならず、国際の場へと広げられ国際神経化学会 (ISN) の様々な活動でイニシアチブを取られて現在は国際神経化学会の President 理事長として世界の神経化学の発展に貢献されていらっしゃいました。

国内でも文部科学省の新学術領域研究グリアアセンブリによる脳機能発現の制御と病態の代表研究者としてグリア研究をリードされ若手研究者の国際交流・育成にも大きく貢献されたことを大変誇りに思っています。

国際化、若手育成など重要なことを先生が始められたお陰で、その芽が育ちつつあるところですが、もう少しというところで、無念であると思いますが、あとは残された若い人達が頑張ってやりとげていくと信じております。どうかご安心ください。

池中先生、大変ご苦勞様でした。謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。どうか安らかにやすみ下さい。

平成 30 年 10 月 29 日

理化学研究所 脳神経科学研究センター 御子柴克彦